

イロナシハナイロ ～片瞑り～

片
瞑
り

登場人物

ツムリ . . . 引きこもりのカタツムリ。配信者。

「黒猫の兄弟たち」

ソウ . . . 長男。しっかりもの。リーダー。

ヤマ . . . 二男。口は悪いが根はいいやつ。

エド . . . 三男。ツムリの推し活が趣味。盲目。

野良猫など

暗闇の中、ツムリの声だけが聞こえる

ツムリ 「おはようございます！」

・・・で、合ってるかな？ 今、何時だろう？ でも、私は今起きたので、多分、朝なんだと思う。あ、時計見ればいいのか」

スマホの明かりで、ぼんやりとツムリの顔が浮かび上がる。

ツムリ 「(独り言のようにも、誰かに向かって話しかけているようにも聞こえる)

あ、まだ夜中だった。じゃあ、こんばんはだ。こんばんは」

ツムリ、スマホに何か打ち込んでいる。ブログ？ SNS など。

以下、スマホに打ち込みながら独り言のような一人語り。

ツムリ 「・・・えっと、昨日はおつでした。楽しんでもらえたかな？ あ・・・」

ツムリ、何か気に入らないリップでも見つけたのか、

ツムリ 「え、何こいつ。ムカつく。

・・・は？ そんなこと言っていないんですけど。

(打ち込みながら) そうですけど、「箱入り娘のツムツムですが何か？」 っと。
・・・なめんな」

ツムリ、スマホを適当に置いて、伸びをする。

ツムリ 「あ~~~~~~~~ねむ・・・」

ツムリ、しばし、「あ~~~~」と呻きながらゴロゴロとしているが、再度スマホを見始める。

ツムリ 「(ぼそぼそと)・・・あ、これかわいい。え、待って、すごいかわいいんだけど。
なにこれ、手作りなん？ どゆこと？ ・・・あ、ああ、そっかあ。・・・そっ
かあ。すご。マジか・・・。」

ツムリ、しばらくスマホを眺める。

ツムリ 「あ、きれー、……ここどこ？ ……イタリア？ ……へー、海外かあ。まあ、そういうのはねえ。国内は……？ あ、ここいいかも。でもなあ、行く？ いやあ、行きたいけど、ねえ……。でもなあ……。」

ツムリ、部屋の中に目を移す。ぐるりと見まわした後、立ち上がり、壁の境に立つ。

ツムリ 「壁あるし。ドアあるけど開けたくないし。窓あるけど、開けたくないし。電気なくて暗いけど、スマホあるし、テレビないけど、スマホあるし、スマホあればどうともなるし。どこか出かけたんだけど、外は……怖いじゃん」

ツムリ、再びスマホを見る。

簡単に身支度を整えて、配信。

ツムリ 「どもー、箱入り娘のツムツムの梓だよ。雑談梓なので、どなたでも気軽にコメントしてねー（徐々に声が消える）」

ソウ、登場。続いてヤマ。エドも続くがエドは目隠しをしている。

エド、スマホを耳に当てながら歩いている。

ヤマ 「（エドに手を差し伸べて）おい、転ぶぞ」

エド 「大丈夫だよ。かわいくない？（ヤマにスマホを聞かせる）」

ヤマ 「（スマホを見て）なにこれ、音声配信？ てか、お前しか入ってないぞ」

エド 「（ややムスツとして）夜中なんだからしょうがないじゃん。

（デレっとして）声がかわいいんだよねえ」

ヤマ 「箱入り娘のツムツムちゃん？」

エド 「兄ちゃん知ってる？」

ヤマ 「（鬱陶しそうに）お前がいつも聞かせてくるんだろ？」

エド 「聞く？」

ヤマ 「聞かない。嫌でも聞こえてくるんだけど？」

エド 「じゃあ、コメントする」

ヤマ 「何がじゃあなんだよ」

エド 「（音声コメント）今日も声が素敵だね、ハート」

ツムリ 「あ、お江戸の子猫さん！ いつもコメントありがと！ 声ほめてもらえるのうれしー！」

エド 「……（ぶるっと震えて）かわいっ」

ヤマ 「（嫌味っぽく）楽しい？」

エド 「楽しい」

ヤマ 「楽しいかねえ、そんなのが」

ソウ 「ヤマもそういう趣味見つけたら？」

ヤマ 「は？ 何言ってるんの兄さん」

ソウ 「人の趣味馬鹿にしないで、自分の趣味見つけたらって話」

エド 「そうだそうだよ」

ヤマ 「俺にだって趣味ぐらいあるよ」

ソウ 「例えば？」

ヤマ 「(考え込んで)・・・読書とか」

エド 「何読むの？」

ヤマ 「吾輩は——」

エド 「猫じゃん」

ヤマ 「・・・名前は——」

エド 「エド!!」

ヤマ 「うるさいなあ、お前の話になっちゃうだろ？」

エド 「だって、兄ちゃんが本読んでるのなんか想像できないもん。いいじゃん、無趣味、自分の時間を大事にしてるってことでしょ？ ポーっとすることで自分の人生に対しての充電を行っている。それはとっても大切なことだよ？」

ヤマ 「何お前、【自分には趣味あるマウント】とってこようとしてんの？ お前の趣味 たったって、配信聞いてコメントしてるだけじゃねえか」

エド 「推し活。知らないの？ 立派な趣味なんですけど」

ヤマ 「俺はもっと活動的で文化的なものを趣味と捉えたいんです」

エド 「推し活だって活動的で文化的ですう」

ヤマ 「あああ？」

エド 「はああ？」

突然、
ツムリの叫び声。

ツムリ 「きゃあああああ！」

エド 「(突然のことに動揺して) えええ！？」

ヤマ 「どした？」

エド 「なんか、ツムちゃんが叫んだ！」

ヤマ 「はあ？」

ソウ 「はいはい、弟たちよ。そのくらいで静かにしたまえ、お客さんだ」

複数の野良猫の鳴き声、威嚇しているようである。

ソウ、ヤマ、爪を出す、四つん這いになるなど、戦闘態勢。
エドはそそくさと物陰に隠れる。

ヤマ 「俺たちの縄張りでなにやってんだああ！！！！！」

猫のケンカ。

ソウ、ヤマ、舞台上を行ったり来たりで暴れる。

エドはヤマに手を引いてももらったり、ソウに庇ってもらったりと積極的に参加している
感じではない。

激しい鳴き声。

所々でツムリの叫び声。

ツムリ 「きゃああああ！！！」

エド 「(コメントしながら) ええ！？ ツムちゃん大丈夫！？」

ヤマ 「(エドをかばいつつ) 馬鹿！ 危ない！」

いくらかの叫び声のち、静かになる。

ソウ 「ふう、あの三毛猫、見たことないな」

ヤマ 「多分通り向こうの連中だよ」

ソウ 「ああ、最近あっち側、人少なくなってきたからなあ」

ヤマ 「シャッター増えてたしねえ」

ソウ 「腹減ったな」

ヤマ 「確かに」

エド 「(突然) わああ！」

ツムリ 「(若干遅れて) きゃああああ！！！」

突然、エド、すっころぶ。

ヤマ 「言わんこっちゃない」

ヤマ、エドを立たせる。

ソウ 「エド、大丈夫か？」

エド 「なんか引かなかったあ」

ヤマ 「なんかって、何？」

エド 「なんか、その辺に・・・」

エド、舞台上に落ちている何かを指さす。

ソウ 「なんかって、何？」

エド 「何だかわかんないから、なんか・・・」

ヤマ 「んん??」

ソウ、ヤマ、エドの指さすあたりを見る。

ここから舞台二分割となる。

下手側にツムリ、上手側に三兄弟。

ツムリ 「ふう、びっくりしたあ。急に揺れたり大きな声が聞こえたり、もう、ほんと、びっくりしたあ」

ソウ、舞台上の「何か」をつつく動き。

すると、ツムリの住処が大きく揺れる。

ツムリ 「うわああ!」

ソウ 「卵?」

ヤマ 「にしちゃあ、形が変だよ」

ヤマ、「何か」を叩く。

ツムリ 「うわあ! さっきからなんなの!??」

エド、自分のスマホに聞き入る。

ヤマ 「石にしちゃ、なんか形が・・・なんだこれ？」

エド 「ちょ、ちょっと待って!」

エド手探りで、「何か」を転がす。

ツムリ、転がる。

ツムリ 「うひゃあああ!」

エド、何かに気が付いて。

エド 「(何かに気が付いて) これ・・・これさ・・・」

ソウ 「どした？」

ヤマ 「何で震えてんの」

エド 「これ、これの中に、多分・・・ツムちゃんがいる」

ソウ 「ツムちゃん？」

ヤマ 「ほら、推し活の」

ソウ 「ああ、さっきの。うん。え？・・・は？」

ソウ&ヤマ 「(エドに) どういうこと？」

エド 「わかんない、わかんないけど、(何かを指さして) これ、動かすと、スマホの中のツムちゃんがすごい驚いたり、悲鳴上げたりしてんの！」

ソウ 「(言いながら疑問になっていく) ああ、じゃあ、これが、その、ツムちゃん？ の、家？」

エド 「多分」

ヤマ 「あ！ わかった！」

ソウ&エド 「何が？」

ヤマ 「これ、この渦巻模様、これ、カタツムリだ！」

エド 「ツムちゃんが？」

ソウ 「カタツムリ？」

エド 「え〜〜〜〜！！！！」

転換、立ち位置変わる。

正面に座って三兄弟。

奥にツムリ。

ツムリ 「なんだかよくわかんないままに、私は保護された。保護してくれたのは黒猫の三兄弟」

エド 「正直、僕の愛するツムちゃんがカタツムリだなんて驚いた。でもきつと、愛は種族を超えられるはずだ！」

ツムリ 「お江戸の子猫さんっていうリスナーさんが、たまたまこの枠を聞いてくれていて、」

エド 「でも、猫とカタツムリなんて成立するのか？ そもそもカタツムリって何類で、性別なんてあるのか？ それに・・・」

ツムリ 「そもそも、私。引きこもりのカタツムリなんですけど。猫って、カタツムリ、食べるのかな・・・？」

三兄弟、それぞれのスマホを介して、ツムリと会話。

以後、ソウとヤマはスマホにコメントを打ち込み、エドのみ音声コメントで会話。

※殻から直接声は聞こえていないものとする。

エド 「わ、ツムちゃんの配信枠にこんなにいるの初めてだね、ビックリ 笑」

ツムリ 「確かに・・・」

ソウ 「(何かに感動して) これが推し活か・・・」

ヤマ 「兄さん、違うよ。(ツムリに) で、なんであんなとこいたの？ 道路のど真ん中だったんだけど」

ツムリ 「わかんないです」

ヤマ 「わかんないことないでしょ。自分の家があんなところにあって」

ツムリ 「わかんないものはわかんないです。私、ここから出たことないですから」

ソウ 「移動したことないの？」

ツムリ 「はい」

ヤマ 「なんで？ カタツムリだろう？ のそのそ移動しないと危ないんじゃないの？」

ツムリ 「私の殻、硬いのでよっぽどのがない限り壊れないんです」

ソウ 「そうは言っても危なかったよ。人間もよく通るし、車だって」

ツムリ 「なんかたまにひっくり返ってコロコロ転がったり、雨がザーザー降る日にゆらゆら揺れてたりするのはわかってましたよ」

ヤマ 「気のまま過ぎるだろ、大丈夫なのこいつ？」

エド 「ツムちゃん！」

ソウ 「最近、通り向こうの連中が縄張りまで来て食い物を漁ってくんだ。食べられなくて何よりだよ」

ツムリ 「え、猫ってやっぱりカタツムリ食べるんだ・・・」

ソウ 「野良猫は食べられるものだったら選んでられないから」

ツムリ 「・・・別に、」

ソウ 「ん？」

ツムリ 「助けてくれなくってもよかったのに」

ヤマ 「はあ？ 別にあんたを助けようとしたわけじゃねえし」

ツムリ 「じゃあ、なんで連れてきたんですか」

ヤマ 「それは・・・あいつが」

エド 「ツムちゃん！」

エド、ツムリの殻を持ち上げる。

ソウとヤマ、二人の様子を眺めている。

ツムリ 「うわああああ」

エド 「ああ、ごめんごめん、汗 ビックリマーク 汗 ビックリマーク！」

ツムリ 「動かすときはそっとしてください！」

エド 「ごめんね、でも、ツムちゃんとこんな風に出会えるなんて嬉しくってさ 笑」

ツムリ 「まあ、そうですね、お江戸の子猫さんはエドさんって名前だったんですね」

エド 「そうだよ！ ツムちゃんはカタツムリだからツムちゃんなんだね。かわいいね、ハート」

ツムリ 「あ、ありがとうございます」

エド 「えへへ・・・あ、でもそんな風に敬語使わないで、配信の時みたいに」

ツムリ 「え？ わかった。エドさん、いつもコメントありがとう」

エド 「ああ、尊い・・・」

ヤマ 「はいはい、イチャついてるとこ悪いんだけどさ、」

エド 「イチャついてる？ 僕と、ツムちゃんがぁ！？ そんな、恐れ多い・・・」

ヤマ 「（ソウに）・・・なんか、こいつのヲタの解像度妙に高くね？」

ソウ 「とりあえず、移動しようか。ツムちゃん？ もそれでいい？ 決まった場所は特にないんでしょ？ 食べたりしないから」

ツムリ 「まあ、別に構いません。悪い猫さんじゃなさそうですし」

ソウ 「よかった。ああ、それと君に少し話があるんだ」

ツムリ 「話？」

エド 「ソウ兄ちゃんが？ これは、ライバル出現か！？」

ヤマ 「お前、うるさいんだよ、さっきから」

三人とツムリ、移動する。

ツムリ 「私は黒猫さんたちの住処に行くことになった。なんだか変な感じ。自分のお家から出たことないのに、お家が勝手にお出かけしたみたい。でも、お家が出かけても、窓もドアも開ける気もしない。真っ暗な部屋が私のすべてでいい。でも、エドのお兄さんが——」

ソウ 「ツムちゃんはさ、どうして家から出ないの？」

ツムリ 「え、怖いからです」

ソウ 「なんか、嫌なこととかあって？」

ツムリ 「なんとなくです。ただ、外が怖い。それだけです」

ヤマ 「引きこもりのカタツムリ」

ツムリ 「（むっとして）なんですか？ 理由なんてなんでもいいでしょ？」

ヤマ 「（歌う）角出せ、槍出せ、頭出せ」

ツムリ 「(むっとして) その歌やめてください」
ソウ 「ちょっと静かに。」

ヤマ 「(少し悩んで) うーん。家から出るのが怖いか……。じゃあちょっと無理かな」
ソウ 「ん？ この引きこもりに何か頼もうとしてた？」
ソウ 「うん。代わりになるかなって」

ツムリ&ヤマ 「は？」

ヤマ 「(何かを察して、ソウに)……。エドの？」

ツムリ 「(ヤマに) エドの？」

ソウ 「そうそう、エドの目の代わり」

ツムリ&ヤマ 「はあ？」

ツムリ 「(ソウに) どういうことですか？」

ヤマ 「(ツムリに) 気が付かなかった？ って、気が付くわけないか、こっちが見えてるわけじゃないんだもんね」

ツムリ 「エドって、目が悪いんですか？」

ヤマ 「見えてない」

ツムリ 「え？」

ソウ 「生まれつきね」

ツムリ 「でも、コメントは」

ヤマ 「あいつだけボイスでコメントしてんの。ビックリマークとか笑とか、口で言ってるだけ、あれ面白いんだよな」

ソウ 「そこまでの不自由はないみたいなんだけどね、耳も鼻もあるし。僕たちもいる。ただケンカになると危なっかしくて」

ヤマ 「隠れてりゃいいのに」

ツムリ 「あんなに元気なのに」

ソウ 「一緒じゃない？」

ツムリ 「え？」

ソウ 「声だけ聴くなら、引きこもりの子には感じない。元気もあって負けん気も強くて、外が怖いだなんて思いもしない。それに、」

ヤマ 「あなたの配信聞くようになってからあいつ元気になったんだよ」

ソウ 「だから、もし行く当てもないならって思っ。まあ、考えといてよ」

ソウ、ヤマ、離れる。

ツムリ 「……。引きこもりが暗いって偏見だと思う。

それに、ずるいと思う。人、じゃなかった、猫の弱み？ みたいなものを前に出して、何かを頼むのって、すごくずるい……。でも」

三兄弟、立ち止まって、

エド 「ん？　なんか、変な匂いする」

ソウ 「（警戒して）ああ、こりゃあ、まずいね」

ヤマ 「（呆れつつ）あの三毛猫、しつこいなあ」

野良猫の鳴き声、先ほどよりも数が多い。

エド 「すごい変な匂いする。めっちゃいない？」

ソウ＆ヤマ 「めっちゃいる」

ソウ 「エド、ツムちゃん連れて隠れてて。これはちよつと骨が折れそうだ」

ソウ、ヤマ、戦闘態勢。

エド、物陰に隠れる。

大きくなる猫の声、一斉にとびかかってくる猫たち。
暴れるソウとヤマ。

右往左往するエド、と――

ヤマ 「馬鹿！　エド！　危ない！」

エド、野良猫に襲われる。

ドアの開く音が響く。

照明が点灯。

ツムリ、エドの目隠しを外す。

ツムリ 「（ドアを開けて）エド！　前！」

エド 「（防御して）ニャー！！　ニャアアアア！！！」

ツムリ 「右！　左！」

エド 「ニャー！　ニャー！」

ツムリ 「後ろ！！！」

エド 「ニャアアアア！！！」

野良猫撃退。

エド＆ツムリ 「（大きなため息）ふああああああ」

ヤマ 「助かったあ」

ソウ 「ありがと、ツムちゃん」

エド 「（意味が分からず復唱）ありがとツムちゃん？」

ソウ 「ツムちゃんがエドの目になってくれたんだよ」

エド 「え？」

ツムリ 「いや、えっと、これは、その・・・」

ヤマ 「（殻の方を指して）おお。角出てる。あ、それ、目なんだっけ？」

エド 「ツムちゃんの顔出てるの！？ かわいいっ？」

ソウ 「うゝん。カタツムリのかわいらしさの基準がわからない」

ヤマ 「かわいいんじゃない？ おっかなびっくりだけど」

エド 「ありがと、ツムちゃん！」

ツムリ 「べ、別に、あんたのためにやったんじゃないんだからね！」

エド 「（感動して）ああああ、ツムちゃんのツンデレいただきましたあ・・・」

ツムリ 「ちよっと、やめてよ！」

ソウ 「ああ、腹減ったあ」

ヤマ 「確かに」

エド 「ツムちゃんは食べちゃダメ！」

ソウ 「はいはい」

ツムリ

「こうしてなんだかよくわかんないままに、私はエドの目になることになりました。初めて見る外の世界はやっぱ怖いけど、それでも、まあ、一人じゃないなら、いくらか大丈夫な気がする。怖くても、目は出しちゃったから。」

ソウ 「（何かに納得して）ああ、カタツムリだ」

ヤマ 「何が？」

ソウ 「エドが見えないだろ？ ツムちゃんは引きこもりだけどちよこつと顔を出してる」

ヤマ 「うん」

ソウ 「まるで片目を閉じて世界を見てる感じだ。だから、片瞑り」

ヤマ 「ああ・・・。（微妙に納得いつてない）ああ？」

ソウ 「それに、目が出たんなら、そのうち全部出てくるよ」

エド 「何の話？」

ソウ 「ツムちゃんはかわいいねって話」

エド 「でしょ！！！！？？？」